

書評：*Through the Crosshairs: War, Visual Culture and the  
Weaponized Gaze*

著者：Roger Stahl  
出版社：Rutgers University Press  
出版年：2018  
総ページ数：vii + 211 pp.

評者：菊池 哲彦  
(社会部門 准教授)

わたしたちは、戦争が平和な日常生活とは切り離された非日常の状態だと一般的に認識している。しかし、戦争と社会との関係の問い直しのなかで、戦争を非日常と日常の対比としてではなく連続において捉える見方が大きくなった。戦後民主主義社会の政治経済体制が戦時総動員体制によって実現されたシステム統合において連続していることを指摘した山之内靖らの共同研究は、そうした見方の先駆のひとつであろう（山之内靖／ヴィクター・コシュマン／成田龍一（編）『総力戦と現代化』（1995年））。

本書、ロジャー・スタールの『照準線を通して：戦争、視覚文化そして兵器化されたまなざし（*Through the Crosshairs: War, Visual Culture and the Weaponized Gaze*）』が問題にするのは、戦争と日常が、社会の政治経済体制だけでなく、経験のレベルでも連続している事態である。本書では、1991年の湾岸戦争以降、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロに端を発する対テロ戦争、そしてイラク戦争へという流れを中心に、「兵器化されたまなざし（*weaponized gaze*）」とそれを軸に編成されたさまざまな視覚メディアの分析を通して、アメリカ市民の経験と戦場の経験との密接な結びつきが検討される。

「兵器化されたまなざし」は、ポール・ヴィリリオの議論を踏まえた、軍事テクノロジーに接続された視覚を支える本書の鍵概念である。ヴィリリオは『戦争と映画』（1984年）のなかで、第一次世界大戦以降、軍事テクノロジーに映画を中心とした映像技術が導入されたことにより、兵士たちの戦場の経験において視覚が突出し、身体性が希薄化していく事態を指摘した。スタールは、この認識を共有しながらも、ヴィリリオの関心があくまでも戦場における兵士の経験に限定されており、銃後の市民の経験という問題を回避していることを批判する（p.6）。評者としては、視覚テクノロジーによる日常世界の変容を論じたヴィリリオの別の著作での議論（たとえば、『視覚機械』（1988年）など）を考えると、この批判はやや厳しいという印象を受けなくもない。しかし、戦場における視覚的軍事テクノロジーと日常世界における視覚の「連動性」をヴィリリオが明確に扱っていないという意味で、この批判は理解できる。

スタールは、ヴィリリオの議論を発展的に引き継ぎ、「照準線（*crosshair*）」を記された兵器の光学装置の映像が、銃後のメディア環境にどのように流通していったのか、兵器化されたまなざしがアメリカ社会のなかでどのように共有されていったのか、そして、それを通して戦場のアメリカ兵と銃後のアメリカ市民の主体性や身体性がどのように変容していったのかを検証していく。本書では、これらの流れが直線的なものではなく、複数の線分が絡まり合った複雑な系譜として描き出される。これらの線分に沿って本書の構成を概観しておこう。

まず、弾頭に装備されたカメラの映像によって目標へと誘導される「スマート爆弾の視覚」が検討される。報道の自由を尊重したことで反戦運動を大きくしてしまったヴェトナム戦争の反省から、アメリカ軍は、湾岸戦争から、軍の公式会見による情報管理を強化した。公式会見で公開されたスマート爆弾映像がテレビのニュース報道でも積極的に使用される。圧縮された短い映像であり、粗いモノクロ映像によって暴力性や人間性が消去されていたことで、スマート爆弾映像はテレビ向きだったのだ。こうして兵器化されたまなざしがアメリカ市民にも共有されていく。市民はこの映像を通して、兵士よりもミサイルに同一化するようになる。スマート爆弾映像は、着弾の瞬間にホワイトアウトし爆発の圧力を感じさせることなく唐突に消失する。スマート爆弾の視覚を通した市民のミサイルとの同一化は、こうして市民の身体性をも消失させていく。

「衛星の視覚」では、冷戦時代から使用されてきた衛星映像が、イラク戦争以降、市民生活に浸透していったことが指摘される（イラク派兵の根拠となった大量破壊兵器工場の証拠として衛星映像がメディアに溢れた）。衛星の視覚は、スマート爆弾映像となめらかに切り替えられて使用されることで、スマート爆弾の視覚を継承しつつその枠組みを拡大する。衛星の視覚は、銃後の市民に「すべてを見る」という神のごとき力を与えると同時に、「すべてを見る」からこそ市民をもその監視の標的とし政治的に武装解除していく。この時、兵器化されたまなざしは軍事的なものよりも警察的なものへと接近していく。

また、衛星映像のテクノロジーは、冷戦終結以降、民間に開放され、軍産連携が強化されることで、衛星映像が双方向アクションのソフトウェアを通して市民の日常生活に直接浸透していく（ビデオゲームや地図アプリケーションなど）。市民は日常生活に浸透した衛星映像を通して、兵器化されたまなざしの戦略を実践していく。そして、衛星の視覚が市民の行動に接続されることで、軍事化された衛星映像それ自体に地球が覆われていく。もちろん、こうした衛星映像のグローバル化が、敵に利用される可能性をも開き、非対称戦争やテロの危険性も増大させたことも指摘される。

最も洗練された兵器化されたまなざしとして扱われるのが「ドローンの視覚」である。「見られることなく見る」ドローンはそれ自体が不可視であるだけでなく、それによる攻撃の意思決定プロセスも不可視化されている。攻撃目標を特定の身体（固有名を持った何某）ではなく、特定の行動パターンの結節点へと抽象化するドローン攻撃は、攻撃する軍事的権力から監視する警察的権力へとさらに接近していく。

また、ドローンのオペレーターはどこからともなくすべてを見る主体であるが、他方で、分散型情報ネットワークとしてのドローン・システムに組み込まれ、攻撃命令を実行するシステムの一部として機能している。作戦に従事するオペレーターの心理的苦悩がテレビドラマや映画によって物語化されることで、市民はオペレーターを犠牲者として捉え、かれらに同一化することでその苦悩を共有する。スマート爆弾の視覚が兵士や市民の身体性を消失させたのに対し、ドローンの視覚はオペレーターの苦悩を共有することで再物質化する。そして、ドローンの視覚は、他方で、双方向性を組み込んだ消費文化（一人称シューティング・ゲームや民生ドローン）と接続することで、その国家的暴力を市民の消費実践のなかにも取り込んでいく。

さらに、オペレーターとの同一化や消費文化を通してドローンの視覚に取り込まれた市民は、ドローン制空下で死に晒された人びとの現実を消失させてしまう。そのとき、ドローンの視覚とその制空下で生きている人びとの現実とのあいだに隔絶が生じるのだ。

そして、「狙撃者の視覚」というアメリカ文化における市民と軍の新たな関係が、映画『アメリカン・スナイパー』(2014年)とその受容に依拠して分析される。ここでは、狙撃者という存在が、ミシェル・フーコーの議論を参照しながら、「牧人的なもの (the pastoral)」として解釈される。『アメリカン・スナイパー』は、すべてを見ることによって羊(仲間や家族、国民)を狼(敵)から護る牧人(狙撃手)の自己犠牲の物語として受容された。アメリカ市民はこうした物語を受け容れることで派兵を牧人的行為として理解し、ジャーナリズムもこの流れに追従していく。狙撃手に結晶化する監視と自己犠牲に支えられた牧人的なものこそ、ポスト911のアメリカ社会の視覚性を特徴づけている。

本書はまた、「兵器化された視覚に抵抗する視覚」についても考察している。とりわけ、ドローンの視覚に抵抗するさまざまな表現活動がとりあげられる。それは、オペレーターをドローンへの従属から解放する物語や映像表現を採用するドキュメンタリー映画であり、不可視のドローンを積極的に可視化したり、ドローンの制空下に生きる人びとの経験を表象しようとするようなアート活動である。こうした取り組みは、いずれも、暴力的支配を物語化し自然化していく兵器化されたまなざしを、脱自然化することによってその暴力性を顕在化させようとするものであることが指摘される。

こうして、本書が明らかにするのは、兵器化されたまなざしの暴力性である。「われわれ」アメリカを「敵」から護るためには、「われわれ」の「敵」に対する暴力を正当化しなければならない。だからこそ、兵器化されたまなざしは兵士だけでなく、市民もそのなかに取り込んでいかなければならない。そして、兵器化されたまなざしは、その監視的な機能をより高めながら、市民をもそのまなざしのもとに取り込んでいく。しかし、「われわれ」を「敵」から護るまなざしは、「われわれ」のなかから「敵」を見出す監視的な権力でもある。「われわれ」を「敵」から護る兵器化されたまなざしは、いつでも反転して、「われわれ」を「敵」と見なして牙を剥くまなざしでもあるのだ。

だからこそ、市民は、自分たちを取り巻いている兵器化されたまなざしが「われわれ」と「敵」を支配しているしくみを理解しなければならない、とスタールは主張する。兵器化されたまなざしのなかにもそれに抵抗する戦略があるのであり、だからこそ、兵器化されたまなざしへの抵抗は、兵器化されたまなざしそのものを經由することによってしか実現しえない。本書は、兵器化されたまなざしを分解することでそのしくみを理解しようとする「リバース・エンジニアリング」(p.152)の試みなのである。

本書が扱うのは、おもに湾岸戦争以降の現代アメリカにおける視覚文化である。だからといって、それは日本で生活するわれわれにとって「あちら」側の問題ではない。それは、日本にとって「いま・ここ」の問題でもある。というのも、映画製作企業やテレビネットワーク企業、IT企業のようにグローバル化するアメリカのメディア産業によって、日本で生活するわれわれも無意識のうちにアメリカの兵器化されたまなざしに深く浸透されているのだから。われわれも、アメリカ市民と同じように、アメリカの兵器化されたまなざしを通して、アメリカの「われわれ」と「敵」の枠組みのなかで生きている。こうした事態に対して無関心でいることは、兵器化されたまなざしに護られているうちは安心して生きられるだろうが、それが反転したときに為す術がない。だからこそ、日本に生きるわれわれも、アメリカにおける兵器化されたまなざしのしくみを理解する必要がある。本書はそのための重要な指針を与えてくれるだろう。